

Title	「洗濯女」から「ウブメ、オギヤナキ」へ：間引き伝説と水妖魔をめぐる雑考
Sub Title	Infanticide et tradition populaire : Lavandière et Ubume
Author	片木, 智年(Katagi, Tomotoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2005
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.89, (2005. 12) ,p.18- 31
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	立仙順朗教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00890001-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「洗濯女」から「ウブメ、オギヤナキ」へ

—間引き伝説と水妖魔をめぐる雑考

片木 智年

はじめに

フランスの水辺に現れる妖怪に「洗濯女」(lavandière)というものがある。いろいろな民俗資料に姿を現す妖怪だが、ジョルジュ・サンドの『田園伝説集』で言及され、日本でも知られるところとなった。ところがこのサンド・ヴァージョンの「洗濯女」¹⁾、類似の伝承の中でもきわめて奇怪なものとなっている。

満月の夜、ラ・フォン・ド・フォンへと向かう道で、奇妙な洗濯女たちを目にすることがある。悪い母親の亡霊で、最後の審判の時まで、その犠牲者たちの死体と産着を洗い続けるように強いられているのだ。彼女たちは絶え間なく濡れた下着のようなものを叩き、絞っている。それは近くによって見てみるとほかでもない子供の死体なのだ。女たちはみな自分の子の死体を手にしている。罪が何度か繰り返された場合は何体かの死体である。

いうまでもなく示されているのは間引き・墮胎の現実である。嬰兒殺しは同じ母親によって繰り返されることも多かったであろう。サンドのテキストでも明記される。しかし、この「洗濯女」と思われる物音を夜中の沼沢で耳にしたとしても、「観察したり、邪魔をしたりしてはいけない」という。見てしまったものには死が待っているからだ。

舞台は一九世紀の中部フランス・ペリー地方。墮胎や嬰兒殺しは母親一人の罪であるというよりは、家族が黙認・隠蔽する習俗であつただろう。実際、サンドの報告するこの伝説も、他の同類の伝承同様、具体的事件を糾弾することはない。どこから発せられ、誰に向けられたのかも明らかではない匿名のメッセージである。が、当事者たちの深い罪の意識と共同体の沈黙の告発は、伝承という形に姿を変え、ひとびとに共有され継承されていたのだろう。本稿ではフランス各地に残る兇殺しをめぐる妖怪の伝説を再検討した上で、わが国に残る伝承と照応させてみたい。

伝承の中の「洗濯女」

さて、いきなり重く切ないテキストから、水妖魔の話題をおこしてしまつたが、一九世紀末、黄昏前のフランスのフオークロアはセビヨヤル・ブラズの努力で広範に記録された。この話のヴァリエーションについても以下のようにかなりのことがわかっている⁽²⁾。

・ブリ地方、今は干されてしまつたら・エイの沼沢では、池に近づくと思議な水音が消え、遠ざかるとまた始まる。人々はそれを「洗濯女の時間だ」といって、池のそばから引き揚げたという。具体的に「洗濯女」の姿を見たという

話ではないが、その姿を見ることがタブーと思われていたことは想像に難くない。

・同様に、ドルー近郊のメルボワ池には「洗濯女ジャンヌ」が夜中に現れては彷徨し、夜明けに池の底に帰っていくとされていたらしい。が、やはり彼女の姿が目撃されたわけではない。なぜ、それが「洗濯女ジャンヌ」と呼ばれるのかすら、はつきりしない。池のほうで夜中にものを洗っているような不思議な水音がするという体験とどこかで結びついていたのだろうと推測されるばかりである。

・アルザスの伝承はもう少し、発展した話形をもっている。女たちが夜間に湖に洗濯に出かけると、太古の昔から、不思議な「白い婦人」が現れるという。彼女は「誰を見ることもなく、誰に話し掛けることもなく、離れた場所に座つて下着を洗っている」だけだが、その下着は死人のものである。洗濯に来た誰かの家族の死を予告しているのだという。

以上のような例を見ると、この伝承、夜更けに「洗濯女」の姿を見ることがへの戒め、つまり、不注意に夜の沼沢や流れに近寄ることへの戒めがメッセージの中核をなしていることがわかる。さらには彼女らが、異界・死の世界と直結した存在と考えられていたことも疑いはあるまい。その姿を見ることが自体が、生者にとっては死の予告、死への誘いとなっているのである。

一方で、サンドの伝えるベリーの話のように、「間引き」という特殊なテーマをもち、発展した話形をもつものに関

しては、さらに複雑なメッセージが隠されているようだ。

まず、決して「見てはいけない」という禁忌についてだが、二重のメッセージがうかがえる。というのも、死体を洗う姿を見てはいけないという表象レベルでの禁忌の背後に、もう一つの生々しい禁忌が垣間見られるからだ。水辺や寝床の中で、しばしば偶然の事故を装って行われた現実の兇殺しの現場を見ることの禁忌である（禁忌とは、仮に見てしまったとしても、言挙げしてはいけない、見なかったものとしなければならぬというメッセージでもある）。

禁忌はまた、この伝承の永續性の保障ともなっている。「正体見れば枯れ尾花」といわれるが、「蛙の類が夜、沼沢でたてる水音と間違えられることも多い」のだろうとコメンテーターは推察している。にもかかわらず、決してその現場を見ようとしてはいけないのである。伝承は、自分自身が力を失わないためのパラドクサルな戒めを忘れていないのだ。

ところで、サンドの描き出す妖怪、死者として静かに眠ることが許されていないのはわかるが、実際に肉体をもった存在なのか、それとも霊的なものが姿を見せているのか、どうにもはっきりしない。どんな大男でも捕えられ、絞殺されてしまうとされている以上、大変な力を持っており、肉体の存在を暗示しているようにも思える。が、他の伝承によると、その本質は白い霧のようなものを思わせるのみである。

キリスト教ではいうまでもなく説明困難な存在であり、俗信レベルで、なじみの説明原理が働くことになる。「洗濯女」は何か現世で悪いことをしてかして、その罪を償っている死者なのである。かりにその罪の形が「間引き」・「墮胎」であるとしたら、犠牲者、つまり洗礼を受けないままで、亡くなってしまった嬰兒の魂は、解釈上、最後の審判まで孩所に留まらなければならなくなる。同様にサンドの描き出す「悪い母親」は、「最後の審判」のときまで、死児を

洗い続けなければならない。母親が強いられる贖罪の行為は、児の置かれてしまった状況からも説明できるのである。

伝承の流言化

一方で、キユイズニエがまとめたノルマンディー地方のヴァージョン³は、かなり文学的な手の入った痕跡が見受けられる。

大革命前のポンタリエールの住民は何年も前から、この「洗濯女」たちによって恐ろしい思いをしていたという。口承民話の非時間性も匿名性も破り、はっきりと現実の時間のなかで事件性をもたせている。伝承が、ある特殊なコンテクストで流言化したらしいことがわかる。

このヴァージョン、多くの「洗濯女」たちが沼のほとりに現れ、夜明け前には姿を消すという。それが何であるかは「老人たち」によると

1 「骸布を洗う悪魔」とも

2 「生前に殺したわが子の手足を絞っている母親の亡霊」とも、

3 「子供に洗札を受けさせることなく死なせてしまった母親が罪を償っている」

ともされる。サンドのヴァージョンに渾然としていた「洗濯女」の本来が分析的に表現されていることがわかる。伝承に対し、思索のフィルターが働いたことを示すものである。

特に1や3においては、キリスト教的な表象にアニミスム時代の水霊信仰を合致させようという力を見ることができ
る。女たちは複数で、環になって不気味な歌を歌っている。そして、夜明け前にはいずこともなく消えうせる。『田園
伝説集』でも、先にあげた伝承以外に、実際に「洗濯女」を見たという男の証言がひかれている。ここでは「洗濯女」
は三人の女悪魔 (diablasses) と表現され、輪になって踊る。悪魔による儀礼、サバトをめぐるステレオタイプのイメー
ジがそのまま適用されていることに気づくのである。

さらに注目には値するのは、この「洗濯女」の災いは他の伝承のように、非時間性ゆえに、常に潜在するものではない
ことだ。あるクリスマスの夜、酔っ払いたちが妖怪たちをとらえて、水に沈めてしまったという奇妙な終わりが訪れる
のである。

翌日、沼は普段の状態を取り戻していた。住民は洗濯女たちの死体を見つけるために沼の水を抜いた。しかし女た
ちは永遠にその墓場へと戻ってしまっていたのである。というのもポンタリエールの洗濯場ではその後、彼女たち
の姿を見ることはなかったからだ。

民衆の俗信に沿う形で解釈的な問題も解決・完了したことがわかる。さまよい出る死者ヴァンピール同様、死の休息を
与えられないでいた罪深い死者たちが、墓場から抜け出しその姿を現していたのだ。今や、彼女達は自分の墓場でやつ
と本来の休息を得たということなのである。

水の精と「洗濯女」

一方で、「洗濯女」が主役としての役割は果たしていないが、バイ・プレーヤーとして伝承に味付けしているケースも見られる。

例えば、「赤頭巾ちゃん」の一ヴァージョンである次の話を見てほしい。狼ならず、豚を連れた不気味な男とのベッドでのイニシエーションを逃げ出した少女は奇妙な「洗濯女」の援助を得る。

この悪い化け物は怒って立ち上がると屋根の上に向けておいた大きな豚に乗って、娘を捕まえようと駆け出しました。途中で河が一本ありましたがそこでは洗濯女たちが洗濯をしていました。

男は言いました。

「小娘通るの見たかい

娘についてく

バルベットの犬連れて」

「見たともさ」洗濯女は答えました。

「シーツを水の上に広げてやってその上を通っていったよ」

「ああ！ それならおれが通れるようにも広げておくれ」

洗濯女たちは水の上にシーツを広げ、悪魔は豚もろとも踏み込んでいきましたが、豚はすぐに沈んでいきます。

男は叫びました。

「飲め、飲め、飲め、大豚よ、みんな飲まなきや二人ともおだぶつだ」

しかし、豚は水を全部飲むことはできませんでしたので、悪魔は豚と一緒に溺れてしまいました。娘っ子は助かったのです。⁽⁴⁾

「赤頭巾ちゃん」の民話は、日本の「やまんば」や「三枚のおふだ」、さらには『古事記』の黄泉の国くだりにまでさかのぼって見られる「呪術的逃走」のモチーフを含んでいることが多い。ここでは、「洗濯女」は娘を不思議なシーツで援助し、河を渡らせている。

別の「赤頭巾ちゃん」の民話ヴァージョンでは、化け物とのベッドシーンを辛くも逃れた少女を助けるのは、娘と直接に言葉を交わす河そのものである。⁽⁵⁾

援助者の姿をとった「洗濯女」は、したがって、もっと一般的な、河の精、水の精との境界があいまいとなってくる。「洗濯女」もまた、「白い貴婦人」や「シレーヌ」、「オンディーヌ」同様に、水の精が女性の姿で人間の前に姿を現すときの形の一つであつただろうと推測できるのである。逆にこの水の精が人間に直接の危険をもたらすものとされるとき、それはシレーヌと呼ばれることになる。同じ「赤頭巾ちゃん」系統の物語には、児捨て・児殺しの民話の一つであると思われるものがあるが、母親の意図どおりに直接に児を殺めようとするのは、水車小屋に出る妖怪ということになっている。これも水の精のとする姿の一つであろうが、その役割はあくまで、現世の母親の児殺しを、異界から幫助する共犯者である。

そんなことを考えると、悪い母親のなれの果てとしての「洗濯女」の特殊性が明らかになってくる。「死者」とはいえ、彼女のもつ「もと人間」としての性格はよくいわれる水の精の「零落」といった概念で説明しうるのだろうか。結局のところ、水の精を元来、人間的なものを越えた自然の魂と考えるか、死した人間が自然に帰っていったものと考えるかということだろう。同じアニミズム的思考でも、答えの出ない堂々巡りが準備されることになる。

結びにかえて——「こなきじじい」から「ウブメ」へ

それでは日本に嬰兒殺しを暗示する妖怪が存在していないのだが、柳田國男の著作や水木しげるのまんがでお馴染みの「こなきじじい」という妖怪が気にかかっている。

人里はなれた山中で赤子の鳴き声を耳にする、しばしば声だけで姿を目にすることは無いというのは、間引きのために山中に捨てられた幼子の亡霊ではないかと直感されるからである。

そんなさびしい山中、しかも夜更けに耳にする赤子の声だけでも恐ろしいが、実際に赤子がいて、抱き上げて見ると老人の顔をしている、しがみついて離れない、などと聞かされるとたまったものではない。ちなみに柳田國男の『妖怪名彙』では次のようになっていいる。「阿波の山分の村々で、山奥にいとやう怪。形は爺だといやうが赤児の啼声をする。あるいは赤児の形に化けて山中で啼いてるともいふのはこしらえ話らしい。人が哀れに思つて抱き上げると俄かに重く放そうとしてもしがみついて離れず、しまいにはその人の命を取るなどと、ウブメやウバリオンと近い話になっている。木屋平の村でゴギヤ啼キが来るといつて子供を嚇すのも、この児啼爺のことをいうらしい。ゴギヤゴギヤと啼いて山中をうろつく一本足の怪物といい、又この物が啼くと地震があるともいふ」。ちなみに「ウバリオン」というのは持

ち上げるとどんどん重くなるという奇怪な石の伝承である。

一方「ウブメ」は多くの方が耳にしたことがあるだろう。「産女」と書いて、「うぶめ」と読まず一般的な言葉ではなく、妖怪を指す言葉としてすでに『今昔物語集』にも現れている。産褥で死んでしまった母親の幽霊とされる（此の産女と云ふは：「女の、子産むとて死にたるが霊に成たる」と云ふ人も有り^⑤）。柳田は「ウブメ」についても多くのページを割いて言及している。

産褥で死んでしまいこの世に思いを残した亡霊なら、一人で出てきてもよいのだが、「ウブメ」は死児と共に現れるのが通例である。柳田によると「同じ産女の怪をアカダカシヨ、又はコヲダカシヨともいって、古い道路の辻などへ晩方に出るものといっていた。やはりその名のごとく子を抱かせようとしたと思われる^⑥」。『今昔物語集』でもやはり、河中に女が現れて、児を抱かせようとするのだが、同時に赤子の「いがゝいがゝ」となく声もするという。母親が自分の死を嘆いて化けて出るのではない。赤子の死を受け入れられず、怨霊と化しているのではと思われる。そう考えると生者に児を「抱かそう」という行為は、せめて児だけでも生者の世界へと救いたいとする母親の念のモチーフではないだろうか。しかし、死の世界のものを生者が受け取ることは許されない。抱いた瞬間に赤子は重くなっていき、抱いたものを逆に死の世界へと導いてしまうのである。

ところで、同じ「ウブメ」の伝承で、母親抜きのももあるということだ。柳田によると「伊予の越智郡の某川は、折々死んだ児が包に入れて、棄ててあるという君の悪い処だが、時として赤子の啼声が川に聞こえるのを、土地ではやはりウブメといっていた。夜ふけてこの地を通行すると、そのウブメが出て両足にもつれるような感じのすることがある。そんな時には自分の草履をぬいて、それぞれこれがお前の親だよと投げて遣ると、一時は啼き止むともいい、又子

供だけで夜釣りなどに行く時は、このウブメはけっして出て来ないともいつている¹⁰。この伝承を受けて柳田は、「つまり赤児を啼かせることが、以前はウブメの怪の要件といつてもよかつたのである」といつている。

しかしながら、母親と共に現れる「児啼き」のモチーフと、「児啼き」だけが独立して現れるモチーフが同じ「ウブメ」の問題として扱われることにはどうも腑に落ちないところがある。

二系統の「ウブメ」伝に共通するのは怨念だろうが、その怨念のあり方に加え、どこからその怨念が発しているかで、決定的な違いがある。前者はお産で親子共に死んでしまった母親が、見だけでも生者の世界へ届けよう、死児と生者の世界との境界を消滅させたいというモチーフであるが、後者には何らかの理由で母親に棄てられ、死んでしまった赤子の怨念、もしくははその怨念・怨霊を恐れる民衆の心が映し出されているように思うのである。それは、草履を投げて母親だとなくさめるといふ対処方にも伺えるし、この化け物が子供だけで夜釣りなどいつた場合には決して現れないことにも垣間見られる。あくまで自分を間引きし、捨てた大人社会にメッセージを送っているのである。そういう意味では「児啼き」だけが独立して現れるモチーフは、「こなき爺」の伝承と文字通りにつながっていくように考えられるのである。

さて、阿波の「こなき爺」の伝承だが、柳田と水木しげるのおかげで日本中に知られるところとなつていたが、肝心の阿波のほうでは、それが自分たちの伝承であるとはほとんど忘れられていたらしい。近年になつて、郷土史家の多喜田昌裕氏が、三好郡の山間部で再発掘したことはマスコミにも報じられた。しかし氏の調査でも、この伝承、「じいさん」といつモチーフなしに、柳田のいつ「ゴギヤ啼キ」、現地の方言ではより赤ん坊の泣き声を模した「オギヤナキ」もしくは「オンギヤナキ」の形¹¹で伝えられるのが一般的らしい。泣き声だけがやはり、独立しているのである。

* * *

ここまでお付き合いいただいた読者は、すでに察知されているように、この「ウブメ」・「オギヤナキ」に相当するフランスの妖怪が、「洗濯女」であると思われる。そして、非常に興味深いと思うのだが、やはりペリー地方の沼沢には、「洗濯女たちの洗うものは、下着でもなければ他の地域のように遺体を包むシートでもなく、鉛色で鈍く透き通った雲のような蒸気のようなもの」とする言い伝えがある。そしてそれは「人間のような形をとる」ことがあり、「洗濯べらに激しくたたかれるたび、洗濯女たちに強く絞られるたび、泣き叫んでいるといわれる。人々は一般に洗礼を受けることができずに死んでしまった子供か、堅信を受ける前に死んだ大人の魂だと考えている」⁽¹⁾ これなどは柳田が言及する愛媛の越智郡の川に残る言い伝えと通ずるところがある。「ウブメ」の本質とは母親の怨霊なのか、捨てられた児の怨霊なのか？非常にあいまいなのが、似たような現象がフランスの水妖魔の伝承でも起こっているのである。

さらに驚くべきことは低地ブルターニュの伝承で、「夜の洗濯女」と呼ばれる妖怪は、「ウブメ」なみに、通りかかった人にシーツを差し出すという。そして、ときおりそのシーツには嬰兒がくるまれ、血を流し、泣いているというのである。⁽²⁾

伝播や歴史的な説明をするには、離れすぎているような気もする二つの国の伝承だが、死児を通りがかりの人に差し出す母のイメージは同時多発といえるほど、普遍的であろうか。人間精神はなべて、出産をめぐる怨霊の表象で、母と児を混同してしまう傾向があるというのだろうか。それに加えて、母親の亡霊としての「ウブメ」は本当に産褥で死ん

「だ女の亡霊と考えるのが妥当なのかということもある。「洗濯女」の伝承が暗示するように、何らかの理由で児を殺めざるをえなかった母親の怨霊ではないだろうか。さらにいうなら、母親と死児が同時に現れる伝承で、主役は本当に母親なのだろうか。死児が主役で、自分を殺めたものへの復讐のために母親の幻を携えて現れるのではないだろうか。そんな風に考えると「ウブメ」もしくは「洗濯女」の表象に母親というモチーフが加わっていたり、いなかたりすることも説明できるのではないだろうか。いろいろな雑念が浮かんでくるのである。

注

- (1) George Sand, *Légendes rustiques*, Guéret, 1987, pp. 31-36
- (2) 以下の三例は、いずれもセビヨのフランス・フォークロア集成より。Paul Sebilot, *Le folklore de France*, Tome 4, Imago, 1982, pp. 249-250
- (3) *Récits et contes populaires de Normandie*, recueillis par Jean Cuisenier dans le Bocage, Gallimard, 1979, pp. 60-62.
- (4) M. Légot によりシーレーヌで採集 *la Revue de l'Avranchin*, 1885, pp. 550-552, *Mélanges*, IX, 1898-99, pp. 90-91
- (5) イタリアで採集されたヴァーシジョンでは、以前お菓子をもらった娘に感謝するために、河は水位を下げる。「Les Contes merveilleux de Perrault (suite)», in *Bulletin folklorique d'Ile de France*, 1951 Juillet-Septembre, pp. 258-259
- (6) 例えば、フランス、ポルトガルで採集されたものは、母親が娘を殺すために化け物が出るといって水車小屋に送り出す。赤頭巾ちゃんと狼の間の有名なやりとりはここではシレーヌとの間の死のプレリュードである。
アラマレスのシレーヌは入ってきてこういいました。「マリア、桶に水を汲んできて私の足を洗っておくれ」震えながら娘は化け物の身づくろいをし、こう聞きます。「アラマレスのシレーヌさん、どうしてこんなに大きなお耳？」
「死人の音を聞くためだ」「アラマレスのシレーヌさん、どうしてこんなに大きなお頭？」「死人にぶつけるためだ」

「アラマレスのシレーヌさん、どうしてこんなに大きなお目め？」「死人を見るためだ」「アラマレスのシレーヌさん、どうしてこんなに大きなお鼻？」「死人の匂いをかぐためだ」「アラマレスのシレーヌさん、どうしてこんなに大きなお口？」「お前を食うためだ」そして女の子は食べられてしまいました。(Op. cit. in *Bulletin folklorique d'Ile de*

France, 1951 avril-juin, pp.226-227)

- (7) 柳田國男『妖怪談義』(講談社学術文庫一九七七) p.199
- (8) 『今昔物語集』本朝部(下)池上洵一編(岩波文庫二〇〇一) pp.212-216
- (9) 前掲書 p.33
- (10) 前掲書 p.33
- (11) 多喜田昌裕『阿波の妖怪・こなきじじい報告』一九九九(平成一一)年一二月三日。WEB サイト <http://scene5.com/yokai/database/data/k/konak.htm> より。
- (12) Laisnel de la Salle, LeBerry, *Croyances et légendes, Maisonneuve et la Rose*, 1968 (première édition : 1875-1881) pp.141-142
- (13) Paul Sebillot, *op.cit.* p.251.